

文化芸術に関するアンケート 2019年・2025年調査結果の比較

※比較可能な設問のみ抜粋して掲載

I あなたの活動している団体についてお尋ねします

問1 (1) 活動のジャンルについて

項目	2025年	2025年(N=49)	2019年	2019年(N=87)
文芸（俳句、短歌、文学等）	12	24.5%	18	20.7%
舞踊（日本舞踊、ダンス、バレエ等）	12	24.5%	16	18.4%
舞台芸術（演劇等）	1	2.0%	7	8.0%
音楽（クラシック、ジャズ、歌謡曲、演歌等）	4	8.2%	19	21.8%
美術（絵画、版画、彫刻、写真当）	5	10.2%	7	8.0%
伝統芸能（和楽器、雅楽等）	3	6.1%	5	5.7%
伝統文化（茶道、華道等）	9	18.4%	7	8.0%
演芸（大道芸等）	0	0.0%	1	1.1%
生活文化（手芸、南部裂織等）	1	2.0%	2	2.3%
その他	2	4.1%	1	1.1%
不明	0	0.0%	4	4.6%
計	49	100.0%	87	100.0%

2025年は「文芸」「舞踊」「伝統文化」の割合が高く、特に「伝統文化」は2019年（8.0%）から2025年（18.4%）へと増加している。

一方、「音楽」は2019年（21.8%）から2025年（8.2%）へ低下しているが、これは2025年調査において、ジャズバンドなど比較的小規模な音楽団体からの回答が得られなかったことが影響している可能性がある。このことから、分野構成の変化は、文化活動の実態変化だけでなく、調査対象団体の構成による影響も踏まえて解釈する必要がある。

問1 (3) 会員やメンバー数について

項目	2025年	2025年(N=49)	2019年	2019年(N=87)
10人未満	14	28.6%	22	25.3%
10人～19人	14	28.6%	24	27.6%
20人～49人	9	18.4%	20	23.0%
50人～99人	6	12.2%	15	17.2%
100人以上	6	12.2%	4	4.6%
不明	0	0.0%	2	2.3%
計	49	100.0%	87	100.0%

両年とも「10人未満」「10～19人」が半数以上を占めており、小規模団体が中心である構造に大きな変化は見られない。一方、2025年では「100人以上」の割合がやや増加しているが、これは活動を継続できている一部の大規模団体からの回答が相対的に多かった可能性がある。

問1(4)①会費等を支払う頻度について

項目	2025年	2025年(N=49)	2019年	2019年(N=87)
年会費	13	26.5%	34	31.8%
月会費	16	32.7%	45	42.1%
随時	3	6.1%	12	11.2%
その他	12	24.5%	5	4.7%
会費なし	5	10.2%	9	8.4%
不明	0	0.0%	2	1.9%
計	49	100.0%	107	100.0%

2025年では、年会費・月会費が混在する「その他」の割合が増加しており、活動形態や会員構成に応じて、柔軟な会費徴収制度を採用する団体が増えていることがうかがえる。

問1(4)②会費等の金額（負担額）は、会員等の種別（クラス等）によって異なりますか？

項目	2025年	2025年(N=49)	2019年	2019年(N=87)
会費なし	2	4.1%	9	9.4%
一律	26	53.1%	43	44.8%
会員等によって異なる	20	40.8%	32	33.3%
その他	1	2.0%	1	1.0%
不明	0	0.0%	11	11.5%
計	49		96	

両年とも「一律」「会員によって異なる」が大半を占めている。

2025年において「会費なし」の割合が減少しているが、これは2019年に「会費なし」と回答していた音楽団体（主にジャズ）からの回答が2025年には得られなかったことが影響している可能性がある。

問1(4)③年間の会費等の総負担額は？

項目	2025年	2025年(N=49)	2019年	2019年(N=87)
10,000円未満	22	44.9%	19	21.8%
10,000円～49,999円	17	34.7%	41	47.1%
50,000円～99,999円	7	14.3%	13	14.9%
100,000円～199,999円	3	6.1%	4	4.6%
不明	0	0.0%	10	11.5%
計	49	100.0%	87	100.0%

2025年では「10,000円未満」の割合が増加しており、会員の高齢化や活動規模の縮小を背景に、会費負担を抑えた運営を行う団体が増えている可能性がある。

問2(1) 練習など、会員等のみの活動の頻度はどの程度でしょうか？あてはまるものを選択してください。

項目	2025年	2025年(N=49)	2019年	2019年(N=87)
週1回以上	12	24.5%	43	49.4%
月に1～3回程度	18	36.7%	34	39.1%
3か月に1～2回程度	3	6.1%	4	4.6%
半年に1回程度	6	12.2%	1	1.1%
していない	5	10.2%	1	1.1%
その他	5	10.2%	2	2.3%
不明	0	0.0%	2	2.3%
計	49	100.0%	87	100.0%

2019年では「週1回以上」が約半数を占めていたが、2025年では約25%に減少している。

これは、2019年に高頻度で活動していた音楽団体からの回答が2025年には得られていないことに加え、会員の高齢化や人数減少、活動負担の増大などにより、定期的な活動が難しくなっている状況を反映していると考えられる。

問2(2) 発表など、不特定多数の方々へ活動内容を見せる機会の頻度はどの程度でしょうか？

項目	2025年	2025年(N=49)	2019年	2019年(N=87)
週1回以上	0	0.0%	0	0.0%
月に1～3回程度	3	6.1%	11	12.6%
3か月に1～2回程度	11	22.4%	14	16.1%
半年に1回程度	10	20.4%	16	18.4%
年に1回程度	15	30.6%	32	36.8%
していない	1	2.0%	4	4.6%
その他	9	18.4%	10	11.5%
不明	0	0.0%	0	0.0%
計	49	100.0%	87	100.0%

発表機会の頻度は、2025年・2019年ともに「年に1回程度」が最も多く、多くの文化団体が一定の発表機会を設けながら活動している実態がうかがえる。

一方、2025年では「月に1～3回程度」といった比較的高頻度の発表が減少しているが、これは、機動力の高い小規模音楽団体（ジャズ等）からの回答が少なかったことが影響している可能性がある。

問2 (3) 活動場所についてお聞きします。

	2025年	2025年	2019年	2019年
施設名等	練習の場	発表の場	練習の場	発表の場
はっち	2	9	6	20
マチニワ	0	3	0	6
ブックセンター	0	0	0	0
八戸市美術館	0	6	0	7
公会堂	3	14	4	22
市公民館	2	4	5	12
南郷文化ホール	0	2	5	5
南部会館	2	5	4	1
更上閣	2	1	6	1
八戸市総合福祉会館	1	2	1	1
ジャズの館	0	1	0	2
地区公民館	19	7	28	13
その他公共施設	2	0	6	4
厨ホール（八食センター）	0	0	0	2
スペースペン（スタジオ）	0	0	1	3
デーリー東北ホール	0	2	5	7
そーるぶらんち新丁（ギャラリー）	0	0	0	0
八戸酒造（煉瓦ホール、北蔵）	0	0	0	1
八通ギャラリー（八戸通運）	0	0	0	1
いわぶち響堂（ライブハウス）	0	0	0	1
パワーステーションA7（ライブハウス）	0	0	1	6
フォーミー（ライブハウス）	0	0	0	0
ロックス（ライブハウス）	0	0	0	1
その他民間施設	7	1	16	13

両年とも、練習の場は「地区公民館」、発表の場は「公会堂」「はっち」などの公共文化施設が中心である。
2025年では民間施設の利用が減少しており、経費負担や利用条件等の面から、公共施設への依存が相対的に高まっているとみられる。

問2 (4)活動を継続していく上で、課題に感じていることは何ですか？（複数選択可）

項目	2025年	2025年(N=121)	2019年	2019年(N=201)
会員等の会費等の費用負担が大きい	3	2.5%	8	4.0%
会費等以外の収入源が乏しい	15	12.4%	23	11.4%
活動に伴う費用負担が大きい	7	5.8%	17	8.5%
練習場所の確保が困難	6	5.0%	18	9.0%
成果発表の場の確保が困難	5	4.1%	20	10.0%
会員数の減少	27	22.3%	52	25.9%
後継者不足（若年層の加入がほとんどない）	30	24.8%	41	20.4%
活動内容をPR	11	9.1%	13	6.5%
PR（広報）の方法が分からない	4	3.3%	3	1.5%
その他	6	5.0%	6	3.0%
なし	7	5.8%	0	0.0%
計	121	100.0%	201	100.0%

両年とも共通して、「会員数の減少」「後継者不足（若年層の加入が少ない）」が最も大きな課題として挙げられている。
特に2025年では「後継者不足」の割合が高く、団体の将来的な存続に対する懸念がより強まっている。
一方、練習場所や発表の場に関する課題は2019年より低下しており、物理的環境よりも人的課題が前面化している点が特徴的である。

問3 活動や発表のPR（広報）は、どのような媒体を利用して情報発信していますか？

項目	2025年	2025年(N=118)	2019年	2019年(N=182)
新聞	26	22.0%	37	20.3%
テレビ	2	1.7%	0	0.0%
ラジオ	5	4.2%	12	6.6%
広報はちのへ	5	4.2%	9	4.9%
ホームページ	5	4.2%	9	4.9%
チラシ・ポスター	21	17.8%	35	19.2%
情報雑誌	2	1.7%	2	1.1%
家族・友人・知人	31	26.3%	44	24.2%
SNS（フェイスブック、ツイッター等）	12	10.2%	16	8.8%
発信していない	6	5.1%	11	6.0%
その他	3	2.5%	7	3.8%
計	118		182	

両年とも「家族・友人・知人」「チラシ・ポスター」「新聞」といった従来型の手段が中心であり、SNSやホームページの活用は限定的である。

これは、団体構成員の高齢化とITリテラシーの課題を反映しており、行政や中間支援組織による広報支援の必要性を示している。

Ⅱ このアンケートにお答えいただいているあなた自身（個人）について

問1(1) 性別

項目	2025年	2025年(N=49)	2019年	2019年(N=87)
男性	19	38.8%	33	37.9%
女性	26	53.1%	43	49.4%
不明	4	8.2%	11	12.6%
計	49	100.0%	87	100.0%

回答者の性別は、2025年・2019年ともに女性がやや多く、男女構成に大きな偏りは見られない。
文化団体の代表者という立場において、性別によらず幅広い層が文化活動の担い手となっている状況がうかがえる。

問1(2) 年代

項目	2025年	2025年(N=49)	2019年	2019年(N=87)
10代	0	0.0%	0	0.0%
20代	0	0.0%	1	1.1%
30代	1	2.0%	6	6.9%
40代	2	4.1%	3	3.4%
50代	4	8.2%	10	11.5%
60代	10	20.4%	31	35.6%
70代以上	32	65.3%	27	31.0%
不明	0	0.0%	9	10.3%
計	49	100.0%	87	100.0%

2025年は「70代以上」が65.3%を占め、2019年（31.0%）と比べて大きく増加している。一方、30～50代の割合は減少しており、回答者の高齢化が一層進行していることが明確に表れている。
これは文化団体の代表者層そのものの高齢化を反映しており、団体運営における世代交代の課題とも強く関係していると考えられる。

問1(3)どのような分野の文化芸術に興味・関心がありますか？

項目	2025年	2019年
日本の伝統的な文化芸術	36	59
最先端の文化芸術	10	26
商業的に成功しているメジャーな文化芸術	3	12
外国の文化芸術	8	26
八戸地域に受け継がれてきている文化芸術	25	39
その他	2	4
計	84	166

両年とも「日本の伝統的な文化芸術」や「八戸地域に受け継がれてきている文化」への関心が高く、地域性や継承性を重視する意識が一貫して強い。
一方、「最先端の文化芸術」「外国の文化芸術」への関心は2019年より減少しており、年齢構成の変化とともに、関心領域がより地域・伝統寄りにシフトしている傾向がうかがえる。

問2(1)八戸市は文化芸術活動が盛んな街だと思いますか？

項目	2025年	2025年(N=49)	2019年	2019年(N=87)
思う	12	24.5%	20	23.0%
やや思う	21	42.9%	41	47.1%
あまり思わない	12	24.5%	13	14.9%
思わない	4	8.2%	3	3.4%
不明	0	0.0%	10	11.5%
計	49	100.0%	87	100.0%

「思う」「やや思う」を合わせた肯定的評価は、2025年で約67%、2019年で約70%と大きな差はなく、一定の評価は維持されている。

一方で、2025年では「あまり思わない」「思わない」の割合が増加しており、活動の担い手として現場を知る立場だからこそ、現状に対する厳しい認識が強まっている可能性がある。

問2(2)活動が充実していると思う項目は？（複数回答可）

項目	2025年	2019年
市民等の活動が活発	22	37
鑑賞の機会が豊富	11	9
体験や学びの機会	1	8
文化施設の数が充実	4	5
個人・団体問わず	10	21
文化施設での有名人	4	3
文化財の保存・活用	4	14
祭、芸能、工芸	25	31
アーティストやデザイナー	2	12
特になし	8	8
わからない	3	9
その他	0	2
計	94	159

「市民等の活動が活発」「祭、芸能、工芸など地域文化」に対する評価は両年とも高く、草の根的な文化活動や地域固有の文化に対する評価が安定している。

一方、「体験や学びの機会」「文化財の保存・活用」などは2019年より低下しており、充実していると実感できる分野が限定的になっていることが示唆される。

問3 文化芸術に関する鑑賞や活動の機会が充実することは、魅力的な街をつくることにつながるといいますか？

項目	2025年	2025年(N=49)	2019年	2019年(N=87)
思う	41	83.7%	71	81.6%
思わない	2	4.1%	4	4.6%
わからない	6	12.2%	5	5.7%
不明	0	0.0%	7	8.0%
	49	100.0%	87	100.0%

2025年・2019年ともに8割以上が「思う」と回答しており、文化芸術がまちの魅力形成に寄与するという認識は非常に強い。

問4 問3で「思わない」又は「わからない」とお答えした方にお聞きます。そのように考える理由は何ですか？
 しょうか。

項目	2025年	2019年
よくわからない	1	0
他都市で体験すればよい	0	1
個人の好み	2	5
その他	5	3
計	8	9

理由は「その他」「個人の好み」が中心で、明確な否定理由は少ない。
 文化芸術そのものを否定するというより、個人の関心や実感の差による回答であることがうかがえる。

問5 文化芸術に関して、行政（県や市等）が取り組む必要があると思う分野は？（複数回答可）

項目	2025年	2019年
鑑賞や体験、学びの機会の提供	20	29
イベントや活動に関する情報提供	24	29
練習等を行う場所の確保	13	23
発表できる場所や機会の確保	21	38
文化施設の整備	18	42
活動に対する支援・助成	24	45
後継者の育成に対する支援	14	26
文化財の保存・活用	10	15
祭、芸能、工芸など、八戸ならではの文化の保存・継承・活用	17	27
アーティストやデザイナー	9	12
特にない	2	4
わからない	0	1
その他	1	4
計	173	295

2025年では「情報提供」「活動への支援・助成」「発表の場の確保」が上位となっており、ハード整備よりも、活動を支える仕組みへの期待が強まっている。
 2019年と比べると「文化施設の整備」への回答が減少しており、施設整備中心の発想から、運営・支援重視へと意識が移行していることが読み取れる。

問6 文化芸術に関して、民間（企業、市民団体等）が取り組む必要があると思う項目は？（複数選択可）

項目	2025年	2019年
鑑賞や体験、学びの機会の提供	18	31
イベントや活動に関する情報提供	23	34
練習等を行う場所の確保	9	20
発表できる場所や機会の確保	18	28
文化施設の整備	14	21
活動に対する支援・助成	21	38
後継者の育成に対する支援	14	21
文化財の保存・活用	7	9
祭、芸能、工芸など、八戸ならではの文化の保存・継承・活用	10	21
アーティストやデザイナー	6	13
特にない	3	4
わからない	2	3
その他	1	4
計	146	247

行政と同様に、「情報提供」「支援・助成」「発表機会の確保」が多く挙げられており、文化芸術の推進は行政だけでなく、民間との役割分担・連携が不可欠であるという認識が共有されている。

問7 普段、文化芸術に関するイベントや出来事に関する情報はどちらから入手していますか。（複数回答可）

項目	2025年	2019年
新聞	35	63
テレビ	10	18
ラジオ	4	15
広報はちのへ	26	33
ホームページ	4	5
チラシ・ポスター	24	42
情報雑誌	3	7
家族	20	31
SNS	10	16
施設（はっち、公会堂	21	31
地区公民館	8	14
特に情報を得ていない	0	1
その他	2	0
計	167	276

2025年でも「新聞」「広報はちのへ」「チラシ・ポスター」「施設」が中心であり、紙媒体・施設拠点型の情報取得が主流である。

SNSやホームページの利用は限定的で、回答者の年齢構成や日常的な情報接触行動を反映した結果といえる。

問8 文化芸術が活かされていくと良いと思う「分野」はありますか。

項目	2025年	2019年
観光	19	24
まちづくり	25	37
国際交流	10	16
福祉	10	19
教育	20	42
産業	4	4
特にない	1	2
わからない	3	7
その他	2	5
計	94	156

両年とも「まちづくり」「教育」「観光」が上位を占めており、文化芸術を分野横断的に活用すべきという意識は安定している。